

スピリチュアルな人生に目覚めるために～心に「人生の地図」を持つ（江原啓之）

私たちが一番大切にしなければならないことは「たましいの成長」だ。それこそが私たちの「人生の目的」なのだ。

この物質界にあるものは、私たちのたましいが成長するための「学びの教材」に満ち溢れている。

霊的真理から見れば、この世に「偶然」はない。すべてが意味のある「必然」である。人生の全ての行き詰まりには、そこから学ばなければならない「間違い」があるのだ。全ては「たましいの成長」のためである。

人は、何かしらの問題を抱えたときに、ふと「生きる目的」が分からなくなる。生きている充実感のない、心の迷子になってしまうのだ。

病気になったときにも、人は壁にぶち当たる。生活の豊かさを求めて必死に頑張ってきた人も、病気になってみて、今までの自分の努力がむなしく思えて失望してしまう。

だが、こうした人生の行き詰まりは、実は不幸なことではない。霊的真理に目覚めるためには、不幸どころか「幸い」だ。

現世の人はみな、目に見えることでしか他人を判断しない。その人の「真意」までは見えないのだ。人を貶（おとし）めるような悪感情というものは、実は「自分の心に内在する感情の映し」であるということだ。

人生の中で誰もが体験することになる三つの大きな苦しみ。それは「死に対する恐怖心」「死別の悲しみ」、そして「人生を不幸と思うこと」だ。

人生に「不幸」はない。「恋人ができないから」「いつ結婚できるか不安だから」「職場の人間関係が辛いから」「お金がないから」「健康や容姿に悩みがあるから」これら全ては現世的な視点、つまり物質的な視点で見た幸不幸にすぎない。現世的な幸せは、どれもがいつ崩れるともわからない一時的なものばかりだ。たとえ一生続いたとしても、肉体が死を迎えたらそこでおしまいである。死後に帰るたましいのふるさとに持ち帰るものは何一つないのだ。

あなたのたましいがあこの世に唯一持っていけるものは、この世で味わった「経験」と、そこから得た喜怒哀楽さまざま「感動」だけである。経験と感動だけが我々のたましいを磨き、浄化向上させてくれるのだ。たましいの見た幸せとは、いかにたくさんの「感動」を得たかに尽きるのだ。

人間が考える不幸とは、そのときの自分にとって、単に「都合が悪い状態」であるというだけのものである。長い目で見れば、そして霊的視点で見れば、その状態こそがその人のたましいに学びを与えてくれるのであり、成長を促してくれるのだ。実際、その時には「不幸」と思えたことが、実は後に用意されている、より大きな幸せのための苦難であったということも非常に多い。

「たましいの年齢」とは、全ての前世を含めて、そのたましいがこれまでにどれほど多くの経験と、深い感動を積み上げてきたかの度合いなのだ。

あなたを憎む人は、あなたに「憎まれることの悲しみや苦しみを教えてくれる人」なのだ。あなたは憎まれた経験から、愛の素晴らしさを知るチャンスをもたらされたのだから、決してその人を憎み返してはいけない。その人は大事なことを教えてくれた上、あなたを憎んだという負のカルマを背負ってくれてもいるのだ。

霊的真理を理解し、常に愛と思いやりを、まわりの人たちに施していくことが必要だ。「してもらったから、してあげる」という受け身の姿勢ではなく、あなたが「まずはじめに」愛と奉仕の気持ちをまわりに与えることが大切だ。

もちろんそこに打算の気持ちがあってはいけない。「これだけの愛を与えたのだから、これだけ返ってこないとおかしい」という計算づくの愛は、本物ではない。

愛情が欲しければ、まずは率先して愛情を与えられる人になり、幸せが欲しければ、誰よりも先に幸せを与えられる人になることだ。